

粉好きの系譜 第 7 回

カスピ海沿岸から世界へ

7000~8000 年まえにカスピ海南岸付近で生まれた六倍体の小麦は、その後急速に世界各地に広まったようだ。メソポタミアでは、王朝が成立するだいぶ前から小麦があった。今から 4000 年少し前の「ウル第 3 王朝」のころには、「楔形文字」による記述の中に取り高まで記載されているという。インダス川の流域に栄えたインダス文明も、少なくともその終末期 (4000 年前) より古い時期には、小麦はじめ麦類によって支えられていた。

六倍体の小麦は、遅くとも 4000 年ほど前には、パミル高原を越えて今の中国・新疆ウイグル自治区にも達した。同省の小河墓遺跡 (3000~4000 年前) から多量の小麦の種子が出土している。私の同僚である中村郁郎さん (千葉大学) や西田英隆さん (岡山大学) らがその種子から DNA を採って調べてみたところ、六倍体の小麦であることがわかったのである。遺跡は今でこそ砂漠の真ん中にあるが、当時は小麦栽培ができる緑の大地であった可能性がある。その後ほど無くして六倍体小麦は黄河の流域に達し、黄河文明を支えることになった。

こうして考えてみると、四倍体小麦をもっていたエジプト文明を含めて、「四大文明」は小麦に支えられた文明であったことがわかる。かといって、古代文明のすべてが小麦に支えられていたわけではない。中国の長江 (揚子江) 流域に栄えた長江文明はイネに支えられた文明であったし、また中南米に栄えた諸文明はトウモロコシやジャガイモに支えられていた。小麦を古代文明必須のアイテムを考えるとすれば、それは同じく小麦に支えられている現代文明の驕りだといわれてもしかたあるまい。

六倍体の小麦はその後日本列島にも達する。以前書いたようにそれがいつ日本に着たかはまだはっきりしないが、弥生時代には西日本では栽培され食されていたことは確かなようである。関西の「粉もの」の文化はこうした流れの上にあるのかもしれない。